

早稲田大学 大学院日本語教育研究科
修士論文 概要書

初級学習者はどのように日本語と向き合い

「自分の気持ち」をことばへと繋げるのか

—ある学習者への「ダイアリー学習」を中心とした支援からの考察—

伝城 里美

2014年9月

第1章 序章

本章では、問題意識、学習者と支援者の捉え方、研究目的、本論文の構成を示した。本研究は、ある初級学習者を支援する中で始まった、「ダイアリー学習」¹を主に、「自己内省」及び「自己表現」の観点から分析・考察し、授業における支援と共に、初級学習者がどのように日本語と向き合い、「自分の気持ち」をことばへと繋げていくのか、その過程を明らかにするものである。

筆者は早稲田大学の日本語教育実践授業(4)²を履修し、ボランティアとしてある学習者(以下「ワンさん」)の隣に座り支援をする機会を得た。ワンさんは来日1か月の学習者であり、授業中多くのことに躓き、母語に頼り、分からないことがあると隣の支援者に視線を合わせ確認することが多かった。あまりにも多くのことに躓き、表現したいであろうことが言葉にならないもどかしさを隣で感じた為、どのような支援ができるのかを考えた。筆者は、初級のうちから「日本語で考え日本語で表現する」プロセス、日本語で考えようとする事への支援が重要なのではないかと考える。来日間もない学習者であればこそ、様々な場面で考えたことを日本語で表現したいと思っているのではないだろうか。

授業での支援が終わりに差し掛かった頃、筆者はワンさんから「まいにち日記をかこうと思う、助」と書かれたノートを渡された。ダイアリーという媒体を通して、ワンさんの自己を表現していくプロセスが支援できるのではないか、また日本語学習の感想や振り返りを書くことで、ワンさんの内省にも効果があるのではないかと考えたのである。

学習者が第二言語でダイアリーを書く場合、大きく二つの効果があると考えられる。一つはダイアリーが「自己を表現」³する場になり得ること、そしてもう一つは、「自己を内省」⁴する場になりうるだろうということである。身近な場面における出来事や体験したことなどについて、日々自分の考えや気持ちなどを日本語で記述していくそのプロセスは非常に重要なものである。初級学習者が「表現していく過程」の重要性を本研究において主張すると共に、教室内のみでは分からない、日本語や日本語学習への向き合い、学習過程への内省などにも注目しながら学習者にどのような変化が見えるのかを併せて調査していく。一人の初級学習者が表現していこうとするそのプロセスを明らかにすることで支援者側への示唆を得る見通しである。

¹ 日々の気持ちを書くことに加え、日本語や日本語学習の感想・振り返りも併せて記述していくものである。

² 早稲田大学大学院日本語教育研究科の日本語教育実践研究(4)である。ボランティアが支援者として教室に入り学習者の隣に座り学習を支援していた。

³ 自分の気持ちや考えを理由などの詳細と共に自分のことばで述べること

⁴ 日本語で自身の学習過程を振り返ること

本研究におけるリサーチクエスション（以下「RQ」）は以下の通りである。

RQ1：ワンさんはどのように日本語・日本語学習と向き合っていたのか。

RQ2：ワンさんはどのように「自分の気持ち」をことばへと繋げていったのか。

RQ3：そこから見える支援者側への示唆とは何か。

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

本章では、先行研究を整理し、本研究における用語の定義及び本研究の位置づけを示した。ダイアリーを書くことは学習者の自己内省により自律的学習を促進する効果があると考えられ、言語学習の文脈では、Little (1991) が、学習のプロセスに対する意識的な内省は、自律的な学習の持つ特徴であるとしている。Moon (1999) は、学びの初期の段階では、事実の報告や表面的な学習しか現れないが、高度な段階になるにつれ、メタ認知のプロセスが現れるのだと指摘する。加えて、「内省のプロセス」Boud (1985) の研究を概観した。一方自己表現の今までの研究は、初級学習者が「自分の気持ち」をアウトプットする活動、つまり「教室活動」の面で多くの研究がなされている。例えば、初級の学習項目を一通り学び終えても、実際の場面を日本語で表現できない学習者は少なくないため、初級日本語学習者が既習の日本語を使って自身の現実を話すことを目的とした活動（杉浦, 2009）や学習項目を使った表現の練習をすべて学習者個人の感情・経験・思想に基づき行うことが自己開示と他者理解を促すとしている「個人化」活動（川口, 2004）などである。

先行研究からも、自己内省及び自己表現の重要性は明らかである。自己表現は、特に教室内活動に焦点が当てられた研究が多く、個人のプロセスに注目した研究は未だ少ない。また、自己内省も初級学習者が目標言語である日本語で長期間に渡り学習過程を記述しているものは少ない。本研究では、初級学習者が「表現していく過程」の重要性を主張すると共に、日本語や日本語学習への向き合い、学習過程への内省にも注目しながら、一人の初級学習者が表現していこうとするそのプロセスを明らかにすることで支援者側への示唆を得たいと考える。

第3章 研究方法

本章では、本研究の調査で用いた研究方法の説明、調査協力者、調査協力者との出会い、及びデータ収集・分析方法について述べた。

本研究では、ワンさんの「学びのプロセス」を第一期の授業におけるボランティア支援

と、第二期の「ダイアリー学習」支援から総体的・多角的に捉える。まず、来日時の日本語学習目的等を明らかにした上で、授業における支援を参与観察及びフィールドノートから分析をした。その上で、「ダイアリー」の記述データから「自己内省」及び「自己表現」の観点において分析を行った。本研究はある一人の学習者を調査する質的研究であるが故、ワンさんの学びを多角的に捉える為、第三者である支援者Cさんのインタビューを調査に加えた。

調査協力者は、中国出身のワンさん(仮名)40代男性である。分析データは以下①～④を用いた。①授業での参与観察及びフィールドノート(2013年4月～7月)②ワンさんが記述したダイアリー(2013年6月～2014年4月)合計80日分③ワンさんへの半構造化インタビュー4回④支援者Cさん⁵への半構造化インタビュー1回である。ダイアリーは、まずデータを打ち込み「カテゴリー」別に記述を抽出した。その後、カテゴリーに分けたものを質的・通時的に分析を行った。

第4章 ワンさんは来日時、日本語をどのように捉えていたのか

本章では、ワンさんがなぜ日本語を学ぶことになったのか、その背景と来日目的を主にインタビューより明らかにした。来日前、自ら日本語を勉強したいと思ったことは一度もなく、そればかりか日本文化さえ興味が無く、ワンさんにとっての日本語は「人生と全く関係のないことば」だったのである。会社の指示により来日が決まり、突如日本語が「学ぶべきことば」として現れたのだ。来日を良いチャンスとして前向きに捉えてはいるが、来日時の目的は1健康、2日本語の勉強、3日本の文化体験であった。母語以外の言語を学んだことのないワンさんは、「日本語の勉強は挑戦である」として捉えていた。

第5章 授業での支援を通して(第一期)

ワンさんの学びのプロセスを総体的に捉える為、第一期の授業における支援を参与観察とフィールドノートより分析し、なぜワンさんがダイアリーを書こうと思ったのかを本章において明らかにした。また、学びを多角的に捉える為、支援者Cさんへのインタビューも併せて調査を行った。ワンさんは当初、疑問を感じ質問をしたくても口頭で聞くことがなく、ノートに書き、視線を合わせることで確認をすることが多かった。隣に座り参与観

⁵ Cさんは授業中常にワンさんの後ろに座っていた。また今回ワンさんへのインタビュー1回目～3回目において通訳をお願いした。インタビューでは主に、Cさんが感じたワンさんの変化について質問した。

察を行うと、「視線を合わせ相手の発言を促す」「言葉を発し始める」「聞き返しを始める」「コミュニケーションにて問題解決を図ろうとする」プロセスが見えてきた。一方、ワンさんが不安や疑問を感じないと、「間違っただまことばを覚えてしまう」こともあったが、ワンさんにとっての日本語は机上のものから、クラスメイトと自分とを繋ぐことばへと変化し始めていた。Cさんもインタビューにて、ワンさんが授業中積極的に質問をしていたことなど「表現意欲の高まり」と「勉強したことを使いたい思い」を語っていた。徐々にことばが人と人を繋ぎ始め、ワンさんはもっと日本語で表現してみたいと感じるようになり、筆者へダイアリー学習の支援を依頼してきたのである。

第6章 ダイアリー学習支援を通して(第二期)

本章では、主にダイアリーの分析より「自己内省」「自己表現」の記述においてどのような変容があったのかを分析し、支援する中での支援者の変容も併せて述べた。まず自己内省の観点からは、ダイアリーの記述を、春学期、夏休み、秋学期、春休みの4期に分け、日付順に「日本語」及び「日本語学習」に関することが記述された部分を抽出し、①内省の観点は何か②記述内容にどのような変化が見られたのかを分析した。また分析にあたり、「内省のプロセス」(Boud, 1985)を援用した。その結果、ワンさんの内省の観点ははじめ、「学習内容」「授業の理解度」「授業への準備」「自分の気持ちへの注目」「クラスメイトや先生との関係性」などに向いていたことが分かった。しかし、夏休み頃から新たに、「学習計画」「学習方法」「N2への準備」「日本文化への注目」などが見られ、学習内容は今までの「ことば・文型・文法」を覚えることへの意識からさらに、「発音・聴解・読解・コミュニケーション」へと向き始めた。区役所で聞いた何気ない会話をダイアリーへ記述するなど、「それは学び甲斐なところ」として文脈の中でことばを捉え理解している様子も見えた。秋学期、春休みには、新たに「学習計画の評価」や「学習方法の再考」が見られるなど、内省の記述は「できなかったことに対する理由を書く」また、「自身の学習方法を批判的に捉える」ようになってきた。

自己表現の観点からは、最初は「事実」や「一日の行動」が主に記述されていたが、徐々に気持ちや感想を書きたいという思いが高まり、「嬉しい」「残念」という一言で自分の気持ちを表し始めていた。意識的に勉強した文型を使用し、新しい語彙を調べてダイアリーに記述をしていくなど、ワンさんの表現したい思いへの工夫が見られていた。そして一文で自分の「考え」を表し始め、少しずつ表現が豊かになっていく様子が記述されていた。

そこには、綺麗な景色を見た時に感じた「家族と一緒になら良かったのに」というワンさんの気持ちや「父への愛」そして「家族と過ごした日々」など「家族」について述べる時、文章は長くなり、詳細な理由と共に表現が豊かになっていた。インタビューでは、ダイアリーを書き始めた当初、「本当は自分の気持ちを書きたい。でも難しい。」と語っていたワンさんが、後のインタビューでは「徐々に書けるようになってきた」「自分の気持ちを書けると嬉しい」と語るまでに変化をしていた。

第7章 考察

第7章では、第4章から第6章の分析結果をまとめた上で総合的考察を行い、本研究の研究課題に答えた。

最初にRQ1「ワンさんはどのように日本語に向き合っていたのか」の結果について述べた。ワンさんにとっての日本語は「人生と全く関係のないことば」だったが、「学ぶべきもの」として突如現れ、「非常に難しい挑戦」として捉えることで、仕事と同じぐらい真剣なまなざしを持ち勉強に取り組んでいた。勉強したことはさらに自信となり授業中の積極的な発言へと繋がっていた。クラスメイトと簡単な日本語で通じ合える喜びを感じ始めた頃から、好きでも嫌いでもなかった日本語が好きになり、ことばが机上の勉強するものから、人とコミュニケーションするためのことばへと変化していった。そして、日本語でさらに表現したいという強い思いから、ダイアリーを書くことを決意した。

ダイアリーを4期に分け分析をした結果、学習上の問題意識についてより具体的に言及する様子が観察され、自らの学習体験を新たに価値づけていたことがわかった。日本語学習には時間をかけて取り組み、学習方法を模索しながらも自分に合った方法を見つけようとし、学習計画を立てるなど、学習過程に敏感になっていた。何を学ぶかよりも、どのように学ぶのか、徐々に学習計画や学習方法を再考するプロセスが見え、批判的な視点を得ることができていた。

次に、RQ2「どのように自分の気持ちをことばへと繋げていったのか」の結果について述べた。分析の結果、ワンさんと筆者との間には常に「ノート」があり、「書く」ことでワンさんが理解促進をしていたことが分かった。ダイアリー学習は、「気持ちが書けない」ところから、徐々に感情を一言で表し始め、勉強した文型を使い、生活の文脈に取り込むことで定着を図っていた。そこには、「勉強した文型を使う」「新しいことばを使う」というワンさんの努力があり、加えて読み手である支援者がいることから、自分が表現してみたい

内容へとさらにチャレンジすることができていたのだ。インプットされた情報は断片化されたものにすぎないため、自分の生活の文脈に取り込むことで、ワンさんの経験を語り気持ちを語り、意味づけがされていったのである。さらに、表現が深まる文章を見ると、仕事で来日したワンさんならではの「家族に伝えたい思い」がそこにはあった。

最後に、RQ3 支援者側への示唆は何かについて述べた。本調査から、口頭コミュニケーション能力こそ初級学習者に必要なものだという筆者の学習観・教育観と、書くことを通して学びを進めたい学習者との間にズレが生じていたことが明らかとなった。今一度、学習者と向き合う時、支援者は自身の学習観・教育観を認識する必要がある。ダイアリー学習支援からは、ワンさんの記述内容に触れ、褒めや質問、感想などを書いて返すことが、より筆者を「他者」として意識し始め、結果、ダイアリーの中で筆者に話しかける場面があるなど、読み手を意識するダイアリーとなったことが分かった。支援者には、学習者がさらに表現したい内容へと挑戦する姿勢を応援することができ、そのためにはどのような実践が可能なかをさらに検討する必要がある。

第8章 結論

最終章では、本研究の結論及び日本語教育への示唆と今後の課題について述べた。

本研究は、日本語学習を始めて間もない学習者が、長期間に渡り、日々の出来事や自分が感じたこと、また日本語学習に関することを日本語で記述し、「自己表現」「自己内省」の観点から分析をし、そのプロセスの変化を示すことができたという点で意義がある。また、ダイアリーからのみではなく、ワンさんの来日時から授業での支援を併せて考察することで、初級学習者がどのように自分の気持ちをことばへと繋げていったのかをそのプロセスを明らかにすることができた。

日本語教育への示唆は以下である。①支援者及び教師は、日頃学習者がどう日本語を生活の中で捉えているのかを知ろうとする意識が必要である。彼らの学習過程への関心に向ける視点が重要である。②初級学習者であっても、日本語で学習過程を振り返ることは、結果として、学習を深く内省するプロセスへと繋がっている。ダイアリーという形式でなくても、日本語で学習過程を内省する時間を取ることは有効である。ただし、その導入時期については検討の余地がある。③自己を表現するプロセスとは、自分の中に湧き出した「自分の気持ち」つまり本人にとって表現する意味のあることを、ことばへと変えていく過程である。一人一人の学習者が「表現したいこと」は違うが、それは本人の文脈の中

にあり、支援者はそのことを認識しながら表現活動を検討する必要がある。

引用文献

川口義一 (2004) 「表現教育と文法指導の融合— 働きかける表現と語る表現から見た初級文法」『ジャーナル CAJLE』6, pp. 57-70.

杉浦千里 (2009) 「話す練習実践報告—初級学習者の「話す力」を伸ばすための試み—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集 24 号』, pp. 69-83.

Boud, D. (1985) reflection: turning experience into learning. London: Kogan Page.

Little, D. (1991) Learner autonomy 1-definitions, issues and problem. Dublin: Authentik.

Moon, J. (1999) A Handbook of Reflective and Experiential Learning: Theory and Practice, London: Routledge.